



久喜地域近代化の 礎を築く

中島家の軌跡



斗南孰謂。端字儼之。中島氏

一讀輒誦。先君大喜。十三能詩文。嶄然見頭

高。不肯卑說希世。狷介善罵。不能假人。人亦

以爲狂。遂自號曰斗南狂夫。以故志業多與

斗南存慶

洞孔堂詩文



中島敦 33年の短い生涯

1909年に東京都四谷区で誕生した中島敦は、幼少期に久喜市で約5年間を過ごしました。作品「光と風と夢」が芥川賞候補に挙がり、選考委員の川端康成や室生犀星から好評を得ましたが、その作家人生は短く、持病の喘息により、1942年12月4日に33歳という若さでこの世を去りました。敦の代表作である「山月記」は、1942年2月に文芸雑誌『文壇』に発表され、この作品で敦は文壇にデビュー。敦の死後、1951年に高校の国語の教科書に初めて採用されて以来、国民教材とも呼ばれるまで親しまれ、現代まで読み継がれています。

幼少期を過ごした久喜

両親が事実上の離婚状態となり、1911年から1915年頃までの間、敦は埼玉県久喜町（現久喜市）にあつた父の実家に預けられ、両親不在のもと、祖母・きくや伯母・ふみなどの手で育てられました。この久喜新町の家は、祖父・撫山が漢学・国学を教えた学舎を久喜本町から移築・新築したばかりのものでした。

敦がこの頃に描いた絵が残されており、たどたどしい手つきながら漢字で自分の名前を書いたものや、身近なおじを描いたらしい、ひげを生やした人物の絵などが確認されています。

其の昔 中島敦



1909~1942

写真提供：県立神奈川近代文学館

久喜地域近代化の礎を築く 中島家の軌跡

「山月記」や「李陵」といった作品を世に送り出した作家・中島敦。また敦の祖父・中島撫山は、漢学や国学を地域住民に教え、数多くの要人を輩出しました。実は中島家の人々は、久喜市にさまざまなゆかりがあります。令和4年は、敦の没後80年にあたります。今月は、郷土資料館で開催している特別展の内容と連動しながら、敦と中島家の人々についてご紹介します。

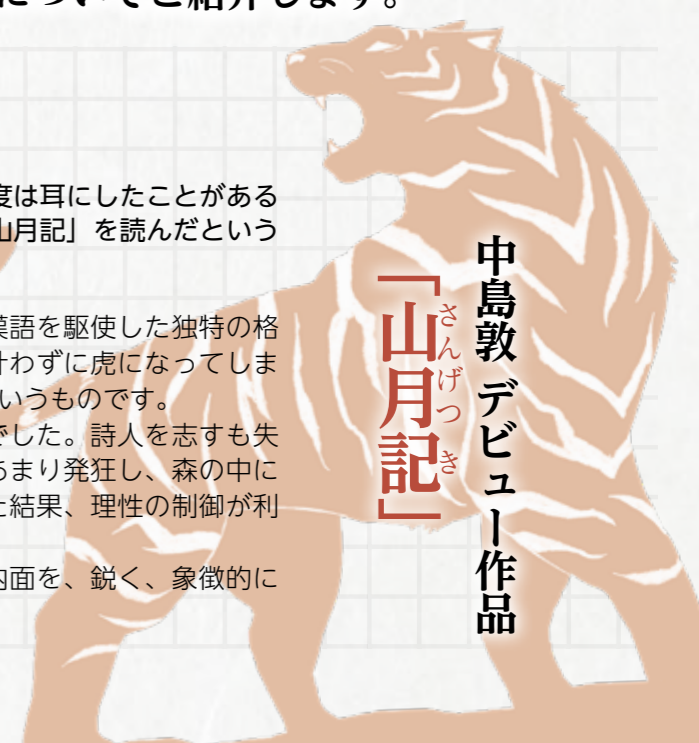
「人生は何事をも為さぬには余りに長い、何事かを為すには余りに短い」

これは「山月記」に出てくる一文です。皆さんも、一度は耳にしたことがあるかもしれません。また、学生時代に国語の教科書で「山月記」を読んだという方も多いのではないのでしょうか。

大まかなあらすじ

「山月記」は、中国を舞台にした作品で、漢語を駆使した独特の格調で書かれています。詩人になるという夢が叶わずに虎になってしまった主人公・李徴が、その運命を友人に語るというものです。李徴は元々エリート官僚で自尊心の強い男でした。詩人を志すも失敗し、再び官僚に出戻りましたが、屈辱のあまり発狂し、森の中に姿を消します。自尊心と羞恥心が膨れ上がった結果、理性の制御が利かない虎になってしまうのです。自己実現と自意識の葛藤に苦悩する人間の内面を、鋭く、象徴的に表現した作品です。

中島敦デビュー作品 「山月記」



第12回 特別展 敦 中島家の系譜 — 中島敦没後80年 —

敦の没後80年にあたり、郷土資料館では作家・中島敦にスポットを当て、祖父・撫山や中島家の人々の系譜を振り返るとともに、中島敦と久喜との関係や作家としての業績について紹介します。



10/8(土) → 12/4(日)

10時~18時 | 入場無料 |

郷土資料館 展示室2 (久喜市鷲宮5-33-1)

問合せ：郷土資料館 ☎57-1200

interview

会を設立したきっかけは…

私の父が漢学者だったこともあり、私も大学では国文学科を専攻していました。中島敦のことはもちろん知っていましたが、市内に住んでいて、中島敦という作家は知っていても、久喜にゆかりがあるということは知らない人が多いですね。

やっぱり、ふるさとを好きになる気持ちは、そこに愛する人がいるかどうか。つまりは郷土の偉人がいるかどうかだと思えます。「おらが町にはこういう人がいた」と知っていると、誇りになりますよね。

それでこの会で、市内の新中学1年生の子たちにパンフレットを配ったり、駅前に看板を建てたりといった活動を行うようになりました。

敦の作品について…

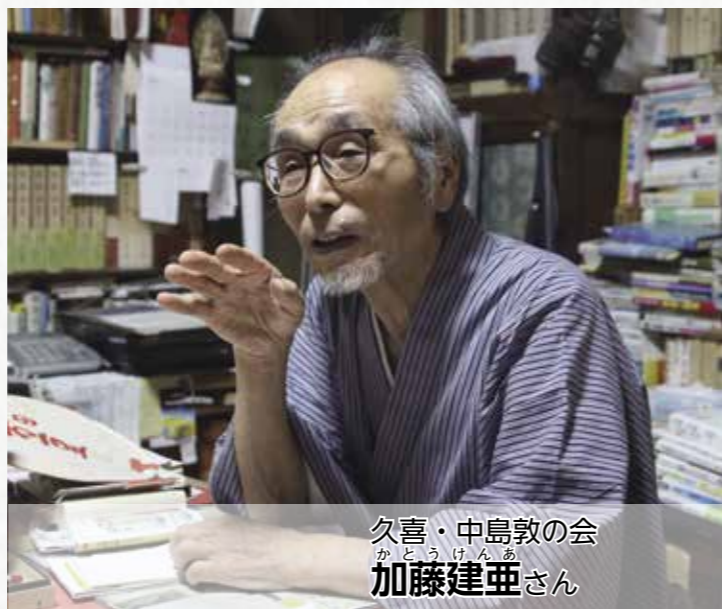
敦の作品の特徴は、男文学と漢語交じりの特殊な文体。森鷗外の再来といわれますが、あの文章は彼にしか書けないんじゃないかな。よっぽど漢学の素養がないと真似できないと思います。彼がこれだけの文章を書けたのは、漢学が身近にある環境で育って、自然と身に付いていたからでしょうね。

実は敦はモテモテだった？

敦の人生の中で、一番印象深いのは

今後の展望は…

現在の活動をこのまま元気に続けていくことですね。まずはそこが一番です。そして、やっぱり地元をもっと見てほしい。敦だけでなく、掘り返せば隠れた偉人がもつといるんじゃないかと思うんです。それを多くの人に知ってほしいと思っています。



久喜・中島敦の会 加藤建亜さん

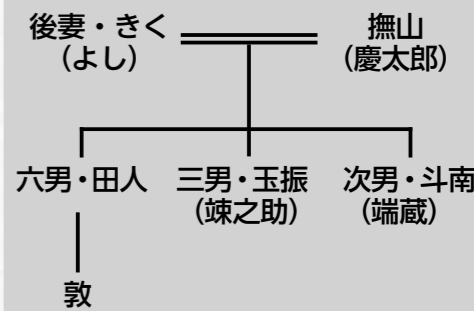
もっと多くの人に 敦の想いを伝えたい

其の三 中島撫山 ぶざん



1829~1911

中島家略系図



中島家と久喜

中島家が久喜市にゆかりを持つに至った背景には、江戸時代、久喜に「遷善館」という教育機関があったことが挙げられます。この「遷善館」で講義をした学者・亀田鵬斎・綾瀬親子は、敦の祖父・撫山の師筋にあたります。

久喜で漢学・国学を

撫山（慶太郎）は、1829年に江戸で生まれました。生家は日本橋新乗物町（現東京都中央区日本橋堀留町）で、武家や大名に駕籠を納める乗物師という商家でした。慶太郎は、29歳まで家業に従事しましたが、明治維新に伴い、揺れ動く江戸を避けて、師筋との由縁があった久喜町に移り住みました。1873年には、

久喜本町で私立学校「幸魂教舎」を開きました。

以後、撫山は漢学や国学を地域住民に教え、その門弟は数千人にも及びました。1911年に83歳で亡くなるまで、教育の重要性を説き、教育を通じて久喜地域の近代化の礎を築きました。

そして、撫山の息子たちもまた、父の背中を見て学問を深めました。



【中島撫山筆「不為言揚」扁額】
(1909)
篆書で刻まれた文字は「ことあげせず」と読み、「ことばに出して論ずることを行わない」ことを意味します。1909年に久喜新町に転居した際の作品と推測されており、これから隠居生活に入るという意味を示していると考えられています。



其の伍 中島田人 たびと
1874~1945

田人は1874年に撫山の六男として生まれました。「幸魂教舎」で父・撫山や兄の指導を受けたのち、漢文科教員の資格を取得しました。1898年に明倫館で教壇に立った後、中学校の国語教師として全国を転々します。晩年の住まいは東京・世田谷にありましたが、久喜にも度々足を運んで、兄・玉振の世話などを献身的に行っていたことが分かっています。

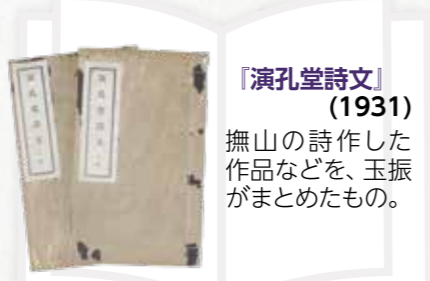
敦の死に際して、田人は「突児七首」という詩を残しており、我が子を亡くした深い悲しみを詠っています。



其の四 中島玉振 ぎょくしん
1861~1940

玉振（諱之助）は撫山の三男として、1861年に生まれました。兄・斗南の後を継いで1885年に言揚学舎の舎主となった後、明倫館にも出講しました。その後中国に渡り、大陸の歴史研究等を進めました。父・撫山や兄・斗南の作品などをまとめ、中島家の歴史を後世に残す仕事を行い、最期は久喜町で過ごしました。

中島敦の作品「斗南先生」では、「お髯の伯父」として登場しています。



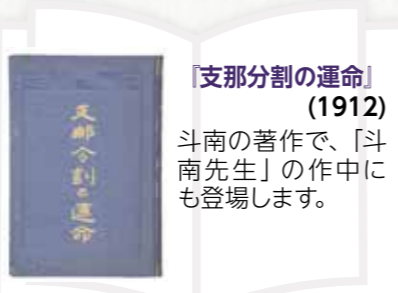
【演孔堂詩文】(1931)
撫山の詩作した作品などを、玉振がまとめたもの。



其の参 中島斗南 となん
1859~1930

斗南（端蔵）は撫山の次男として、1859年に生まれました。幼少より父・撫山の教えを受け、1882年に「言揚学舎」（「幸魂教舎」を改称した学舎）の舎主を引き継いだとされます。1893年には同志の宮内翁助とともに、久喜に私立専門学校「明倫館」を開き、学問を受ける機会が少なかった農村地域のために奔走しました。

斗南は若い頃から優秀で、漢詩や小説の創作、外国文学の翻訳なども行っており、文才もありました。また、斗南は敦の伯父にあたり、敦は斗南を題材に「斗南先生」という作品を残しています。敦は自分と斗南の気質が似ていることを自覚していたようで、作中では斗南の性格や思い出が多く語られています。作中で「利根川べりの田舎」から届いた斗南のはがきが登場しますが、この「田舎」が久喜のことを指しています。



【支那分割の運命】(1912)
斗南の著作で、「斗南先生」の作中にも登場します。

歩いて回れる！
中島家
ゆかりの地
マップ



光明寺
撫山が眠る墓
墓地の一角に、撫山の墓があります。
(久喜市本町1-9-56)



中島敦案内板
敦を顕彰して作られた案内板が、久喜駅西ロータリーの一角等に設置されています。
(久喜・中島敦の会により設置)



撫山中島先生終焉之地碑

撫山と敦が過ごした中島家の住居跡地
1873年、撫山は私立学校「幸魂教舎」を久喜本町宅に開き、1909年にこの場所に移築・新築しました。
(久喜市久喜中央、個人所有)



近くには中島敦の記念碑や案内板も▶

マンガを
発行しました！

電子図書館
はこちら▶

久喜地域の人を育てた
中島撫山先生

市立図書館や公文書館、郷土資料館で閲覧できます。また、市立図書館の電子図書館でもご覧いただけます。購入をご希望の方は、郷土資料館または文化財保護課（鷲宮総合支所）、公文書館窓口でお求めいただけます。
(1冊100円)
文化財保護課文化財・歴史資料係
(鷲宮内線231)